

明治13年(1880)、山形県荒砥町に生まれる。明治36年東京帝国大学建築学科を首席で卒業、同年母校の講師となり、助教授を経て、大正7年に教授。家屋耐震構造論を確立し、大正4年に学位取得。辰野金吾の後を受けて大正・戦前昭和の建築界に君臨した。

佐野の活動は絶えず実社会の実践と結びついており、東京工業大学と日本大学工学部の創設に大きな役割を果たす一方、神奈川県庁をはじめとする庁舎建築の指導をし、渋沢栄一の依頼により昭和4年には大学をやめ(講師としては残る)、数年間清水組副社長となった。

大正5年、同郷の警視総監岡田文次に建築警察の必要を説き、笠原敏郎を警視庁技師に推薦し、建築取締規則原案策定を内田祥三、笠原敏郎と共に実行した。大正7年、片岡安、藤原俊雄と共に都市計画法制定運動を始め、後藤新平以下各省大臣を説き廻った。佐野は都市計画調査会委員、都市計画中央委員会委員、都市研究会理事として活動し、同法の制定と宣伝普及に関しては、学者としては最大の功績者である。

震災復興では、後藤新平のブレーンとして帝都復興院理事兼建設局長となり、区画整理断行の先頭に立ち、さらに東京市建設局長として事業推進を指導した。佐野は復興助成会社の創設のために中村是公市長と共に奔走

し、また市教育局の反対を押し切って小学校のRC造と水洗便所、焼房の設置を実現し、自論である都市の不燃化と衛生思想の向上を実践してみせた。大正4年より、明治神宮造営局参事・参与となる。外苑計画は本多静六、原熙の案が対立したため、佐野のスケッチを実施案とした。大正11年、民間宅地開発の先駆けである岩崎家の大和郷(電線地化、町内会の日本初法人化)の設計をし、自宅を設けた。

大正10~11年、佐野は満鉄に招かれ、撫順市街計画案の決定を行なった。関東軍と満州国国都建設局の依頼で昭和7~11年毎年満州に行き、新京市計画を指導した。新市街全域の水洗便所設置を実現させ、また官庁建築は独特の東洋風意匠とさせた。新京の都市計画・建築の関係者の多くは佐野の門下生であった。戦後、前田多門のページの間、東京市政調査会の責任者となり、よく後藤新平の話を職員を励した。昭和31年、鎌倉の自宅で没する。英字ではRicky Sanoと署名した。

